

## 目のイラストの開閉が食品のおいしさに与える影響

海和美咲<sup>1)</sup>、澁谷頭一<sup>2)</sup>、稲葉洋美<sup>2)</sup>

1) 新潟医療福祉大学 医療福祉学研究科

2) 新潟医療福祉大学 健康栄養学科

【背景・目的】 おいしさは食品の中だけに存在するのではなく、食事の気分、体調、場の雰囲気、共食者の存在などの条件によって影響されるため、物理的・化学的手法のみでは計測できない。共食（誰かと一緒に食べる）には、食品の摂取量の増加、食事中の会話の増加や不定愁訴の軽減などの効果が報告されている。共食によるおいしさの変化に着目した研究では、実験参加者の同調性が高いときにおいしさ評価が上昇したことから、おいしさの認知には一緒に食べる人や雰囲気などの社会文脈的な要因も大きな役割を果たしていることが示唆されている。さらに、食行動を共にする対象が視覚刺激として存在するだけで食行動変容を引き起こすことが明らかになってきている。例えば単純な目のイメージが存在するとき、人間は利他的行動をとる等、寛大さが促進されるといわれている。先行研究で、人間は開いた目のイラストを見た時食品をよりおいしそうだと評価することが分かっている。これらのことから、目のイメージは実際の人間と同様に行動変容を引き起こし、さらにおいしさの評価にも影響を与えられられる。

本研究では、開いた目のイラスト及び閉じた目のイラストに見られている状態で実際に食品を摂取すると、おいしさ評価はどのように変化するかを検証した。

【方法】 健常な女子大学生 24 名を対象とした。空腹度を揃える為実験前 2 時間以上絶食とした。実験は個室で行った。①開いた目のイラスト②閉じた目のイラストの 2 条件を PC 画面に各 10 回ずつランダムに提示し、画面が切り替わる度にスナック菓子（株式会社ブルボン、プチうすしお）1 枚を摂食させ、Visual Analog Scale (VAS) 法でおいしさの評価させた（図 1 参照）。

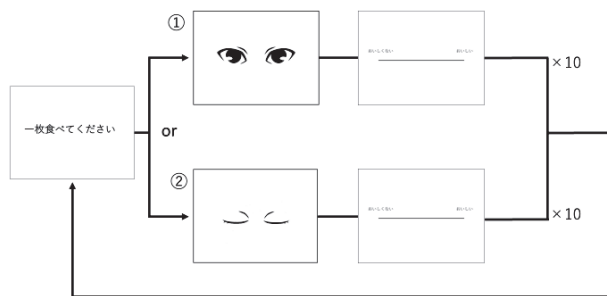


図 1 実験手順

解析は R(3.2.4, 2011)を用いて分散分析を行った。本研究

は、新潟医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得ており（第 18132-190212 号）、関連する利益相反はない。

【結果】 対象者の身体状況及び実験室環境を表 1 に示す。

表 1 対象者の身体状況及び実験室環境

身長 (cm)	体重 (kg)	年齢 (歳)	体調	空腹度
159.9 ± 5.1	51.3 ± 6.0	20.6 ± 1.6	3.5 ± 0.9	3.8 ± 0.6
気温 (°C)	湿度 (%)	照度 (LUX)	騒音 (dBA)	
19.6 ± 1.2	37.5 ± 6.0	5.1 ± 0.3	47.3 ± 0.8	

おいしさの評価は、開いた目のイラストのとき  $67.9 \pm 5.2$ 、閉じた目のイラストのとき  $66.2 \pm 5.7$  となり、開いた目のイラストを見たときの方が、閉じた目のイラストを見たときに比べておいしさの評価が有意に高かった ( $p=0.0145$ 、図 2 参照)。

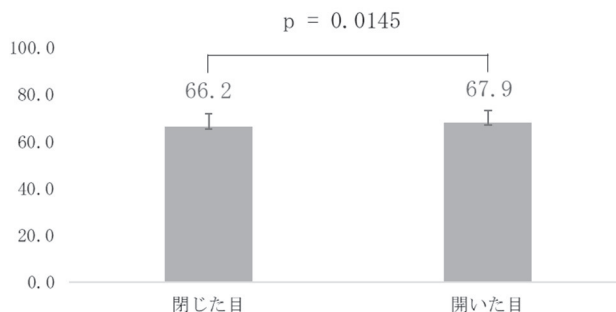


図 2 おいしさの評価

【考察】 開いた目のイラストを見たときの方が、閉じた目のイラストを見たときに比べて、摂取した食品をよりおいしいと評価した。このことから、開いた目のイラストは食行動変容を引き起こしたと考えられる。食行動変容を引き起こす要因として、社会的促進や社会的抑制が挙げられる。社会的促進では覚醒水準の上昇に伴う集中力の上昇等が、社会的抑制では他者評価の懸念や注意力の散漫等が食行動を変化させることが分かっている。

目のイメージが利他的行動を促進することは、他者からの悪い評判を回避することが要因の一つと考えられている。そのため、「食品の嗜好調査」として行われた本研究では「食品をよりおいしいと評価すること」が規範となり、開いた目のイラストの存在が利他的行動を促進させたと考えられる。「食品をおいしくない」と評価することは、被験者自身が否定的に評価されるのではないかと予測（評価懸念）を引き起こし、結果的においしさの評価を上昇させることに繋がった可能性が考えられた。

【結論】 開いた目のイラストが存在する状況では、閉じた目が存在するときに比べて食品のおいしさの評価が有意に高かった。これは社会的抑制（他者からの否定的な評判への懸念が生じたこと）によって引き起こされた可能性が示唆された。